

オンライン入試の意義と課題

—九州工業大学における総合型選抜 I の事例をもとに—

大野 真理子 (京都大学大学院), 花堂 奈緒子, 播磨 良輔 (九州工業大学)

九州工業大学では、新型コロナウイルス感染症の感染拡大状況を鑑み、令和 3 年度総合型選抜 I においてオンライン入試を実施した。本研究では、受験者がオンライン入試をどのように捉えたかを分析することを通じて、その意義と課題を明らかにするため、総合型選抜 I の合格者に対し質問紙調査を行った。結果、自宅や学校等で受験できたことを前向きに捉える受験者が大半を占めた。また、オンライン接続テストの実施は、端末の操作方法等の試験当日までに想定可能な受験者の不安の軽減に一定の効果があったことが示された。一方で、試験当日の予期せぬトラブルや不正行為をする受験者への懸念等、事前に対処できない事象への不安が一部の受験者に残ったことも示された。

キーワード：オンライン入試, オンライン CBT, 受験環境, 不正行為, 受験者の不安度

1 はじめに

1.1 新型コロナウイルス感染症対策とオンライン入試

令和 3 年度の大学入学者選抜では、新型コロナウイルス感染症の感染拡大を防止するという観点から、徹底した感染対策を講じた上で入学者選抜を実施することが求められた。「令和 3 年度大学入学者選抜実施要項」(文部科学省, 2020) では、「第 14 新型コロナウイルス感染症対策に伴う試験期日及び試験実施上の配慮等」の項目が新たに設けられ、各大学が実施上配慮すべき事項が明記された。特に、総合型選抜及び学校推薦型選抜では、「ICT を活用したオンラインによる個別面接やプレゼンテーション、大学の授業へのオンライン参加とレポートの作成、実技動画の提出、小論文等や入学後の学修計画書、大学入学希望理由書等の提出などを取り入れた選抜を行う」等の工夫が、感染対策の一例として示された。合わせて、そのような入学者選抜を実施する際は、「入学志願者による利用環境の差異や技術的な不具合の発生等によって、特定の入学志願者が不利益を被ることのないよう、代替措置などの配慮を行う」よう要請されている。

上記要項において感染対策の一例として示された ICT を活用したオンラインによる入学者選抜を、本研究では「オンライン入試」と呼ぶことにする。令和 3 年度選抜では複数の国公立大学において、様々に工夫を凝らしてオンライン入試を実施した事例が報告されており(大学入試のあり方に関する検討会議, 2021)、九州工業大学の総合型選抜 I もそのひとつである。

1.2 本研究の目的

九州工業大学の総合型選抜 I は、制度設計時点では

オンラインでの実施を想定して設計された選抜ではなく、後述するように新型コロナウイルス感染症への緊急対応として急遽オンライン実施へ切り替えたものである。そのため、選抜方法の一部がオンラインで実施可能なものに限定されるなど、当初の制度設計からの変更を余儀なくされた部分はあったものの、総合型選抜 I で求める学生を選抜するための観点は維持できたものと考えている¹⁾。オンライン入試への移行にあたり、実施運用等については複数回にわたる学内での協議を重ねて決定し、実施後のフィードバックも行ってきた。同様にオンライン入試を行った大学からの事例報告では実施準備等の運用面での内容、つまり大学側の視点からの報告が大半を占める(例えば、立脇, 2021)。一方で、受験者がオンライン入試という新たな取組みをどのように捉えたかという、受験者視点からの評価は十分になされているとは言いがたい。

そこで本研究では、オンライン入試に対する受験者心理に着目することで、オンライン入試の意義ならびに課題を明らかにすることを目的とする。以下、総合型選抜 I のオンライン入試の概要について紹介した後、具体的な研究方法について説明する。

2 九州工業大学の総合型選抜 I について

2.1 オンライン入試への全面移行の経緯

九州工業大学では、令和 3 年度入学者選抜より、新しいことを学ぼうとする力や書き出す力を活かす入試として、大学入学共通テストを利用しない総合型選抜 I を導入した。総合型選抜 I は 2 段階選抜方式で、いずれの段階においても、課題をその場で提示し、所定の時間で解答する選抜方法を含むため、対面で実施す

る場合、受験者は2回来場する必要がある²⁾。

令和2年度当初は、新型コロナウイルス感染症が収束し対面での試験が実施できることを期待していたが、8月の時点で、試験会場となるエリアでの収束の見込みは立っておらず、特に高齢化が進むエリアが多い九州では、県外移動者の感染に対する強い危機感が持たれる状況であった。そのため、受験者の来場が困難になる状況や、来場後に受験者家族等への影響が生じる可能性も考慮し、受験者の安全確保ならびに受験機会を担保するという観点から、9月2日に実施方法を対面からオンラインへと全面移行することを公表した(図1)。

図1 スケジュール・試験会場に関する変更点

なお、オンライン入試の受験に必要な端末やネットワーク、受験会場の確保等が困難な受験者に対しては、九州工業大学戸畑キャンパスへの来学による受験許可や機器等の貸出しを行うことで、受験機会が損なわれないよう配慮・措置を講じた。ただし、来学受験の場合には、オンラインでの受験者との公平性を期すため、本学が貸与する端末とネットワークを通じての会場内オンライン受験を原則とし、対面による受験は認めないこととした。

2.2 選抜方法の概要とオンラインによる実施方法

2.2.1 第1段階選抜

第1段階選抜は、レポート及び課題解決型記述問題により構成される(図2)。レポートでは、3つの分野(数学、科学、工学)の講義(各20分)を受講し、講義ごとに重要だと考えたキーワードを受験者が選び、簡単な解説をそれぞれ5分で記述する。その後、3つのうち1つの講義を選び、その内容を要約するとともに、受講を通じて感じた入学までの学びの必要性につ

いて考察し、30分でレポートにまとめる。レポート全体を通しての試験時間は105分である。課題解決型記述問題では、小中学校・高等学校で学んだ算数・数学及び理科の内容をもとにした2つの問題の中から1つを選択し、図表などを用いて60分で解答する。

第1段階選抜		第2段階選抜			
レポート	課題解決型記述問題	事前提出	オンライン		
		学びの計画書	適性検査 数学・理科	適性検査 英語	個人面接
105分	60分	—	100分	30分	10-20分
150	150	100	400	120	180
300			800		

図2 選抜方法に関する変更点(第1段階選抜)

第1段階選抜では、オンラインツールとしてZoomを用いた。受験者には、パソコン、タブレット、スマートフォンのいずれかの端末1台を用意することを求めた。受験者は、受験票に記載されたミーティングIDとパスコードを入力してミーティングルームにアクセスし、監督者は、Zoomの画面共有機能により講義動画や課題解決型記述問題の配信を行う。また、解答中は監督者がカメラを通じて受験者をモニタリングするとともに録画を行い、ネットワークや機器のトラブル、不正行為の防止等に適宜対応した³⁾。

2.2.2 第2段階選抜

第2段階選抜は、第1段階選抜の合格者を対象に行い、学びの計画書、適性検査(数学、理科、英語分野)、個人面接により構成される(図3)⁴⁾。学びの計画書は事前提出課題であり⁵⁾、大学入学後にどのようなことを学びたいかについて記述する。適性検査では、CBT(Computer Based Testing)方式による選択式問題をオンラインで出題し、数学・理科はあわせて100分、英語は30分で解答する。個人面接では、第1段階選抜のレポートならびに課題解決型記述問題の解答、学びの計画書、適性検査(数学、理科)及び調査書等を参考に、受験者と複数名の本学教員との質疑応答を10～20分で行う。

九州工業大学 総合型選抜 I の変更点 ※詳細は「本学ホームページ」及び「学生募集要項」参照

選抜方法に関する変更点：第 2 段階選抜 (10/17・18)

学びの計画書が事前提出課題に、適性検査・個人面接がオンライン実施になります

第 1 段階選抜		第 2 段階選抜			
オンライン		事前提出	オンライン		
レポート	課題解決型 記述問題	学びの 計画書	適性検査 数学・理科	適性検査 英語	個人面接
105分	60分	—	100分	30分	10-20分
150	150	100	400	120	180
300			800		

オンラインで実施【要インターネット接続】
 自宅等にある端末(PC、タブレット等)から受験
※選択式問題をオンラインで解答する形式

オンラインで実施予定【要インターネット接続】
 自宅等にある端末(PC、タブレット等)から受験
※当初予定から面接時間を増やし、1人あたり10～20分で実施

図 3 選抜方法に関する変更点 (第 2 段階選抜)

第 2 段階選抜でも、第 1 段階選抜と同様にモニタリングのオンラインツールとして Zoom を用いた。これに加え適性検査の出題では、CBT プラットフォーム TAO⁶⁾を用いた。受験者は Zoom を起動した状態で、インターネットブラウザ上で TAO にアクセスする必要があるため、タブレット、スマートフォンでの受験者は、Zoom 起動用の端末とインターネットブラウザへのアクセス用の端末として、いずれかの機器 2 台を組み合わせることを求めた⁷⁾。

2.2.3 オンライン接続テストの実施

受験者側のインターネット環境や受験会場を確認し、実施方法に関する疑問を解消することで試験当日のトラブルを可能な限り回避し、円滑に試験を実施することを目的として、第 1 段階選抜実施前に、来学受験を希望した者を除くすべての受験者を対象に、大学担当者と受験者とが試験当日と同じ環境下で双方向のやり取りを行う「オンライン接続テスト」を実施した⁸⁾。

受験者には、試験当日に受験する予定の会場から、オンライン接続テスト用の Zoom ミーティングルームへのアクセスを求めた (図 4)⁹⁾。まず、カメラ、マイクによる画像や音声のクリアさ、受験会場の様子を確認した。その後、試験当日に使用する Zoom の機能として、画面共有によるサンプル画像や動画の見え方、チャット機能の使い方等を確認し、質疑応答の時間を設けた。接続テストにより、インターネット接続状況が不安定で受験に支障が生じる可能性が考えられた場合は、来学受験への変更や機器の貸し出しを提案した。

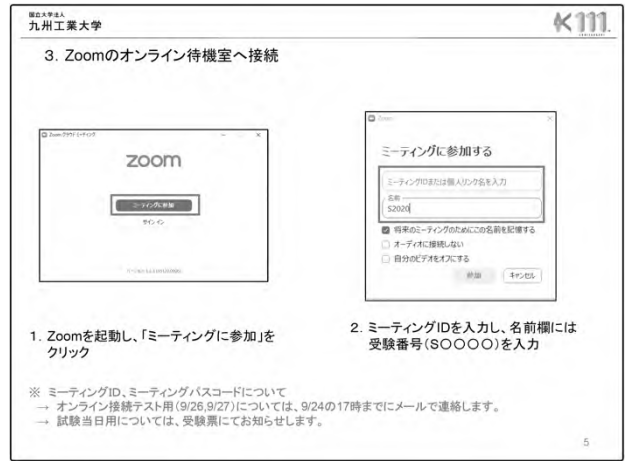


図 4 令和 3 年度オンライン受験マニュアル (抜粋)

なお、第 1 段階選抜の受験者数は 196 名であり、合格者数は 88 名であった。第 1 段階選抜の合格発表後、88 名全員に対し、第 2 段階選抜で用いる CBT プラットフォーム TAO へのアクセス方法を通知して所定の期日までにサンプル問題への解答を終えるよう求め、TAO の操作方法を事前に確認するための機会を設けた (図 5)。第 2 段階選抜の受験者数は 88 名であり、総合型選抜 I の最終合格者数は 41 名であった。

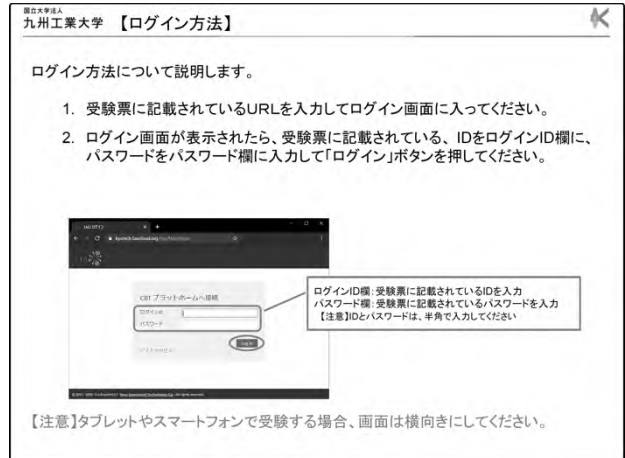


図 5 適性検査 CBT の受験操作手順について (抜粋)

3 方法

3.1 調査対象・時期・手続き

総合型選抜 I の合格者 41 名を対象に、質問紙調査を行った。令和 3 年 2 月 3 日～14 日の回答期間で、調査回答用のウェブサイトからの回答をメールで依頼した。なお、実施にあたっては、個々の回答は統計分析のみに使用し、取得した個人情報には適正に取り扱うこと、個人が特定されない形で研究発表等に用いる場合があること、回答の内容は入学後の成績等にはいっ

さい影響しないことを明示し、倫理的配慮を行った。

改善する必要があると感じたことについて、それぞれ自由記述で回答してもらった。

3.2 調査項目

3.2.1 ICT 端末を用いた作業経験の有無

総合型選抜 I 「出願前」に、パソコン、タブレット、スマートフォンを用いた作業経験があったかどうかについて、作業ごとに、「(1) あった」、「(2) なかった」の二件法で回答してもらった。作業経験の選択肢は、「(1) インターネットブラウザで情報検索をしたことがある」、「(2) メールのやりとりをしたことがある (LINE 等の SNS は含まない)」、「(3) Zoom などのオンライン会議システムを使ったことがある」、「(4) Word などのワープロソフトで文書を作ったことがある」、「(5) PowerPoint などのプレゼンテーションソフトで資料を作ったことがある」の 5 つを設けた。

3.2.2 オンライン入試に対する不安度

オンライン接続テスト「実施前」及び「実施後」のそれぞれの時点におけるオンライン入試に対する不安度について、当時を振り返った上で、「(1) 不安だった」、「(2) やや不安だった」、「(3) あまり不安はなかった」、「(4) 不安はなかった」の四件法で回答してもらった。さらに、オンライン接続テスト「実施前」に抱えていた不安ならびに、オンライン接続テスト「実施後」に残った不安については、自由記述で回答してもらった。

3.2.3 受験時のトラブルや困ったことの有無

受験時にトラブルや困ったことがあったかどうかについて、選抜方法ごとに、「(1) あった」、「(2) なかった」の二件法で回答してもらった。さらに、「(1) あった」を選択した者に対し、トラブルの内容について自由記述で回答してもらった。選抜方法は、「(1) レポートの動画視聴時」、「(2) レポートの解答時」、「(3) 課題解決型記述問題の解答時」、「(4) 適性検査の解答時」、「(5) 個人面接の待機中」、「(6) 個人面接の面接中」の 6 時点に分類した。

3.2.4 オンライン入試のよかった点と要改善点

オンライン入試を受験してよかったと感じたことと

4 結果と考察

4.1 回答者の概要

37 名から回答があり、有効回答率は 90.2%であった。回答者が第 1 段階選抜を受験した場所は、自宅が 23 名 (62.1%)、在学中の学校が 9 名 (24.3%)、九州工業大学戸畑キャンパス (来学受験) が 5 名 (13.5%) であった。分析には SPSS 27 を用いた。

なお 3.1 で示したように、本調査の対象は合格者である。よって、選抜効果の影響により統計量に歪みが生じている可能性があるため、得られたデータの解釈には慎重になる必要がある。

4.2 ICT 端末を用いた作業経験の有無

ICT 端末を用いた作業経験を有すると回答した者の数と割合について、表 1 にまとめた。端末の種類にかかわらず、ほぼすべての受験者がインターネットブラウザでの情報検索を経験していた。また、メールの送受信、ワープロソフトやプレゼンテーションソフトでの資料作成についても、7~9 割弱の受験者がいずれかの端末で作業経験があると回答した¹⁰⁾。一方、Zoom などのオンライン会議システムを使用したことのある受験者の割合は、もっとも使用率の高いスマートフォンでも 6 割程度と他の作業内容に比べて低くなっており、オンライン入試の受験のために初めて Zoom を使用した受験者が少なくなかったことが示された。

4.3 オンライン入試に対する不安度

来学して受験した 5 名を除く 32 名を対象に、オンライン接続テスト「実施前」と「実施後」の 2 時点におけるオンライン入試に対する不安度について尋ねた。その平均値の差を、対応あり t 検定で検討した結果を表 2 に示した。 $t(31) = 3.96, p < .001, 95\% \text{ CI } [0.32, 0.99]$ で有意差があり、「実施前」に比べて「実施後」のほうが、不安度が有意に減少していることがわかった。また、Hedges の効果量(g)を算出した結果、 $g = 0.69$ となり、中から大の効果のみられた¹¹⁾。

表 1 ICT 端末を用いた作業経験の有無

	(1) インターネット n(選択率)	(2) メール n(選択率)	(3) Zoom n(選択率)	(4) Word n(選択率)	(5) PowerPoint n(選択率)
経験あり	35 (94.6%)	12 (32.4%)	16 (43.2%)	33 (89.2%)	33 (89.2%)
	34 (91.9%)	12 (32.4%)	16 (43.2%)	5 (13.5%)	4 (10.8%)
	37 (100.0%)	28 (75.7%)	22 (59.5%)	5 (13.5%)	2 (5.4%)

オンライン接続テスト「実施前」に抱えていた不安の内容については、22 件の自由記述があった。項目別にまとめると、端末操作やインターネット接続トラブルへの不安等の「接続や端末操作に関すること」が 15 件ともっとも多かった。続いて、不正行為をする受験者に対する不安等の「不正行為に関すること」が 5 件、「その他」が 2 件であった。さらに、オンライン接続テスト「実施後」に残った不安の内容については、15 件の自由記述があった。項目別にまとめると、「実施前」の不安とほぼ同様に分類することができ、「接続や端末操作に関すること」が 9 件ともっとも多かった。続いて、「不正行為に関すること」が 3 件、「その他」が 3 件であった。

オンライン接続テストの実施が受験者の不安の軽減に一定の効果を示した点については、4.2 で明らかになったように、Zoom の操作に慣れていない受験者が少なくなかったことが影響していると考えられる。オンライン接続テストに参加することにより、実際に Zoom に接続しながら試験当日の操作方法や実施の流れを体験でき、また不明点を担当者に直接質問することができたことにより、事前に想定できる不安を試験当日までに和らげることができたものとみられる。一方で、オンライン接続テスト「実施後」に残った不安の内容に目を向けると、試験当日の予期せぬトラブルの発生や、不正行為をする受験者の存在への懸念など、オンライン接続テストによる体験だけでは払拭しきれない、その発生も含めて事前に対処できない事象への不安が一部の受験者の中に残り続けたことが窺える。

これらの受験者の不安に対し、大学側では、試験中のトラブル発生時に受験者がとるべき行動として、チャットによる連絡や緊急連絡用の携帯電話による電話連絡などの方法を明記し、受験者側に伝えるといった対応を取った。不正行為についても、どのような行為がそれに該当するのかを明記し、試験開始前に受験会場に受験者以外の者がいないことや、カンニングにつながるメモ等の有無をカメラ越しに確認し、試験中に録画を行うといった具体的な対応内容を示すことで対応した。大学や個々の受験者だけでは制御できない事象への不安を解消することは非常に難しいとはいえ、

受験者が安心して受験できる環境を整えるためには、対面実施と同一レベルとまでは難しいとしても、実施方法等の検討の余地はまだ残されていると言えるだろう。

4.4 受験時のトラブルや困ったことの有無

受験時のトラブルや困ったことの有無について選抜方法別にまとめたところ、トラブル等があったと回答した受験者数は、第 1 段階選抜では、レポートの動画視聴時に 4 名、レポートの解答時に 1 名、課題解決型記述問題の解答時に 2 名であった。具体的なトラブルの内容としては、動画の途切れや端末のバッテリー減少といった、受験者側のインターネット接続環境や端末に起因するものが挙げられた¹²⁾。第 2 段階選抜では、適性検査の解答時に 12 名、個人面接の待機中に 1 名、個人面接の面接中に 2 名が、トラブル等があったと回答し、具体的なトラブルの内容としては、受験者側のシステム利用手順の不備、インターネット接続環境や端末に起因するものが挙げられた。第 1 段階選抜で発生したトラブル同様、第 2 段階選抜におけるトラブルも、大学側が受験者の状況を把握し、フォローすることが難しいものであった。

なお、適性検査において他の選抜方法よりも多くのトラブルが発生したのは、CBT プラットフォーム TAO の操作に不慣れな部分が残っていた可能性が推測される。適性検査は他の選抜方法と異なり、Zoom の接続に加え、インターネットブラウザを開いて所定のウェブサイトアクセスし、ログインするという複数のプロセスを踏む必要がある。2.2.3 でも示したように第 1 段階選抜の合格者に対しては、第 2 段階選抜までに、試験当日と全く同じ手順で TAO のテストサイトにログインし、サンプル問題に解答することを求め、約 9 割の受験者が解答していた。しかし、試験当日は緊張や焦りからか、操作上での不備によってサイトへのアクセスやログインができないという状況が複数名の受験者において発生した。このようなトラブルが発生した受験者に対しては、緊急連絡用の携帯電話に大学から直接連絡し、予備のミーティングルームへの移動を指示した上で、個別に操作方法を案内する等の対

表 2 接続テスト「実施前」と「実施後」のオンライン入試に対する不安度

	平均値	標準偏差	t (df = 31)	平均値の差[95%CI]	効果量(g)[95%CI]
接続テスト実施前	2.88	1.01	3.96 ***	0.66 [0.32, 0.99]	0.69 [0.29, 1.08]
接続テスト実施後	2.22	0.87			

注) *** $p < .001$

応を行った。また、試験開始時刻の繰下げにより正規の試験時間を確保した。今後の大学側の対応として、CBT の操作についてもオンライン接続テストでの確認事項に加えるなどして、受験者と双方で実施手順を確認し、当日のトラブルを未然に防ぐ方法を講じる必要がある。

4.5 オンライン入試のよかった点と要改善点

オンライン入試を受験してよかったと感じたことについては、36 件の自由記述があった。項目別にまとめると、自宅等の慣れた場所で受験することができ緊張せずに済んだ、会場に行くための時間や交通費等がかからなかった等の「受験場所・受験環境に関すること」が 26 件ともっとも多かった。続いて、オンライン入試という新しい方法を体験できたことが良い経験になった等の「オンラインという実施方法に関すること」が 5 件、感染リスクが減少して安心できた等の「新型コロナウイルス感染症に関すること」が 3 件、「その他」が 2 件であった。

このうち、「受験場所・受験環境に関すること」の中には「新型コロナウイルス感染症に関すること」について言及するものも含まれていたが、前者への言及が主である記述は「受験場所・受験環境に関すること」として集計している。オンライン入試は、特定の会場に受験者が一斉に集まって試験を受ける必要がないという新しい入学者選抜の実施のあり方を提示した。このことを受験者の大半が良い点として捉えたことは、オンライン入試の意義を考える上で重要であると言えるだろう。

一方、オンライン入試で改善を要すると感じたことについては、22 件の自由記述があった。項目別にまとめると、待機時間が長すぎる等の「待機時間に関すること」が 9 件ともっとも多かった。これは、個人面接の待機時間といった特定の選抜方法に限らず、第 1 段階選抜及び第 2 段階選抜におけるあらゆる選抜方法に関して言及があった。続いて、Zoom の接続方法やインターネット環境への不安等の「接続や端末操作に関すること」が 5 件、不正防止へのさらなる取組みを求める等の「不正行為に関すること」が 3 件、接続エラーの減少を求める等の「CBT（適性検査）のシステムに関すること」が 3 件、直接問題冊子に書き込んで解答したい等の「CBT（適性検査）の解答方法に関すること」が 2 件であった。

このうち、「待機時間に関すること」及び「CBT（適性検査）の解答方法に関すること」については、対面実施であったとしてもほぼ同様の実施スケジュールで

あり、かつ問題冊子を配付しない実施方法であったことから、オンライン入試に固有の課題とまでは言えない。待機時間に関しては、オンライン入試だからこそより慎重な本人確認が求められ、すべての選抜方法において集合時刻から試験開始までに十分な時間を設ける必要があった。しかし、受験者側からすれば、オンライン入試の利点を活かし、対面実施ほど待機時間は長くないのではないかという期待があったものと思われる。大学側としても、特に個人面接では、可能な限り受験者の待機時間を短縮できるようスケジュールを調整したが、マンパワーの関係上、すべての受験者が集合後すぐに受験できる環境を用意することはできなかった。それゆえ、待機時間が課題と認識された可能性がある。また、「不正行為に関すること」や「接続や端末操作に関すること」については、オンライン接続テスト「実施後」に残った不安にも類似の内容が記述されていることから、今後のオンライン入試のあり方を検討する上で、受験者の公平・公正感を損ねないような実施方法の構築は強く求められていく部分である。

5 おわりに

5.1 オンライン入試の意義

新型コロナウイルス感染症という思わぬ脅威が原動力となった本学におけるオンライン入試の実施経験を通して、考えられるその意義をまとめると次のようになる。

受験者にとっては、当然ながら受験のための「身体の移動」という制約を外せることである。このことは、感染症と共に生きていく時代の入学者選抜において受験機会の確保の点だけでなく、特に遠隔地の居住者においては受験するための経済的な負担が軽減され、真に希望する大学の選抜にトライしやすくなることを意味する。このことは、受験者自身の強い志望に基づく特別選抜においては、特に大きなメリットとなる。大学が用意する所定の会場に行かずに受験することが受験者に好意的にとらえられるならば、オンライン入試は大学側にとっても、より広い地域から志望度の高い受験者を得られることで多様な背景を持つ人材の受け入れにもつながり、それが学外試験場を設置せずとも達成できるという点はコスト面も含めて大きなメリットとなる。

また、実施においても大学担当者の感染リスクを低減できるという点で試験監督や面接評価者を手配する上で有用であろう。総合型選抜 I は、選抜実施時期が授業開始時期と重なっているため、面接を行う選抜に

ついて年度当初より学内から感染に対する不安の声も聞かれていたが、オンライン実施としたことによって解消され、面接評価者の手配ならびに教育への影響も抑えることができた。

ただし、オンライン入試への移行が可能であった背景としては、九州工業大学が理工系大学であり教職員の多くが ICT ツールへの親和性が高かったという点は言及しておきたい。総合型選抜 I の適性検査は従前より CBT での実施に向けた準備をしており、問題や端末が整っていたこともあって、短期間の準備によって移行が可能になった。また、感染拡大が始まった令和 2 年度末よりオンラインによる入試説明会や受験相談会を複数回行ってきた経験があり、Zoom や端末の操作マニュアル等の整備を含めて教職員への訓練が十分に行っていた。そのため、比較的容易にオンライン実施への移行ができたとはいえ、その段階に至るまでに相当の準備が必要であることは言うまでもない。オンライン入試を推進していくためには、大学側でも ICT の利活用に関する教職員スキルの向上に努めていく必要もあるだろう。

5.2 オンライン入試の課題

一方で、オンライン入試には課題もある。第一に、インターネット接続環境というインフラの問題である。受験者及び大学双方に安定的なインターネット接続環境が無ければ、実施は困難となる。第二には、選抜方法が制約を受けるという点である。一般選抜の個別学力検査における筆記試験のように対面式で厳密な公平性が求められる選抜方法をオンラインで実施することは、受験者側から見た不安要素の払拭が非常に困難であり、オンライン入試には適していない。そのため、従来とは異なる考え方で「知識・技能」を問えるような試験内容・方法を開発することが必要になるだろう。また、受験者同士での密な会話等をもとにするグループワークのような評価手法も、実施方法とともに評価側の評価技能の習熟が必要であることから、オンラインへの移行は容易ではない。筆者らもグループワークの実施検討は行ったものの、令和 3 年度選抜では最終的に実施を見送った。

選抜方法に制約を受ける中であっても、工夫することでまだまだオンライン入試の可能性は広がる余地があるだろう。受験者が安心して受験し、自らの実力を出し切ったと感じられるような評価方法の構築が、大学側には今後も求められる。

5.3 オンライン入試の展望

このようにオンライン入試は、一定の意義が見いだされる一方で課題も多く残されており、発展途上の実施方法であることは否めない。しかし、この取組みを新型コロナウイルス感染症対策としての暫定的な措置としてみなすのではなく、今後の入学者選抜の実施方法のあり方を検討する上での「はじめの一步」と捉えることが重要であると筆者らは考える。川嶋 (2012) が指摘するように、平成 23 年に発生した東日本大震災は、受験者が同一箇所に集まって受験するという現行の大学入学者選抜のあり方の限界を示す出来事であった。新型コロナウイルス感染症という事象も、同様の限界をふたたび関係者に想起させたことは明らかである。選抜方法によっては、オンライン入試に向き不向きがあることは上述のとおりだが、オンライン入試だからこそこできることもあるはずである。その特性を活かした制度設計・実施方法の検討が今後も継続的になされていくことに期待したい。

5.4 本研究の限界と今後の課題

本研究は九州工業大学における総合型選抜 I の合格者のみを調査対象としており、またサンプル数も限られているため、結果の一般化可能性については限界がある。総合型選抜 I の全志願者を対象に同調査を行った場合や、オンライン入試を実施した他の入試区分でも同様の結果が得られるかどうかについては、結果の解釈に慎重になる必要がある。

九州工業大学では今回のオンライン入試の成果を活かし、令和 4 年度入学者選抜より、国際バカロレア選抜の面接実施方法についてオンライン入試を標準とすることを決定している。このことから今後は、受験者が志願する段階からオンライン入試への不安等を調査し、可能な限りそれらを払拭することができるよう、本調査の対象範囲を広げていくことが求められるだろう。

注

- 1) もっとも、オンライン入試により一部の選抜方法が代替された入学者と、当初の制度設計に基づく選抜方法による入学者とで、入学後のパフォーマンスに違いがないか等、追跡調査による継続的なフォローは求められる。
- 2) 対面実施の場合、第 1 段階選抜では、九州工業大学戸畑キャンパス (福岡) 以外に、東京・大阪にも会場を設置する予定であった (第 2 段階選抜の会場は戸畑キャンパスのみ)。
- 3) このような受験者の動向確認を可能にするため、大学側であらかじめ受験者を複数のグループに分け、グループごとにミ

- ーティングルームを用意した。その上で、対応するグループのミーティング ID とパスコードを受験票に記載した。
- 4) 第2段階選抜にはグループワークも含まれていたが、「令和3年度大学入学者選抜に係る新型コロナウイルス感染症に対応した試験実施のガイドライン」(大学入学者選抜方法の改善に関する協議, 2020) に沿った実施が困難であると判断したため、令和3年度入学者選抜では実施しないこととした。代わりに、グループワークにおける評価項目・観点を他の選抜方法に加えることで、アドミッション・ポリシーに沿った選抜が可能となるよう工夫した。
 - 5) 制度設計時は、試験当日に課題を見て、30分で解答する方式を採用していたが、オンライン入試への移行に伴い、事前提出課題へと実施方法を変更した。解答時間の制限は外した。
 - 6) Open Assessment Technologies S.A.社が提供するeラーニングにおけるテスト・ドリルの国際的標準規格である QTI/LTI に完全準拠した Web ベースの CBT (Computer Based Testing) プラットフォームを指す (Infosign, 2021)。なお TAO には、受験者の解答進捗状況をモニタリングするプロクタリング機能があるが、本学では利用しなかった。代わりに、定期的に手動で Result メニューから稼働状況を確認した。
 - 7) タブレット、スマートフォンの場合、Zoom 起動中にインターネットブラウザ等の他のアプリケーションを起動すると、Zoom のカメラが一時的に停止されてしまうため、受験者側のモニタリングができなくなることから、2台体制とした。パソコンによる受験者は、第1段階選抜同様1台で可とした。
 - 8) 来学受験者に対しては、大学側で設定を済ませた端末を配付するなど複雑な操作が不要な状態で受験できるようにしたため、接続テストへの参加は不要とした。なお、試験の実施方法等に関する疑問がある場合は、電話やメールで随時問合せを受け付け、接続テストへの不参加による不利益が生じないようにした。
 - 9) Zoom ミーティングルームへのアクセス方法等については、オンライン受験マニュアル等を通じ、事前に受験者が準備できるように資料を用意した。
 - 10) ただし、回答者のうち3名は、タブレットを用いた作業経験がないと回答した。
 - 11) ただし、本設問は合格が決まった後に当時の状況を振り返って回答してもらう回顧調査のため、回答時点の状況が統計量に影響を与えている可能性がある点に留意する必要がある。
 - 12) 講義動画の配信にあたって大学側では、帯域幅が十分であることをネットワーク担当等に事前に確認している。その上で、配信用パソコンの有線接続が可能な講義室(端末用講義室)で有線接続により実施するなどの対策を行った。

参考文献

大学入学者選抜方法の改善に関する協議 (2020). 「令和3年度大

学入学者選抜に係る新型コロナウイルス感染症に対応した試験実施のガイドライン」 文部科学省

https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/senbatsu/20201030-mxt_kouhou02_1.pdf (2021年8月23日).

大学入試のあり方に関する検討会議 (2021). 「第27回配布資料【参考資料4】新型コロナウイルス感染症に対応するための個別試験に関するオンラインの活用」 文部科学省

https://www.mext.go.jp/content/20210621-mxt_daigakuc02-000016052_14.pdf (2021年8月23日).

Infosign (2021). 「CBTプラットフォームTAO」 Infosign <https://edu.infosign.co.jp/tao> (2021年8月23日).

川嶋太津夫 (2012). 「大学入試のパラダイム転換を目指して」 東北大学高等教育開発推進センター編『高等学校学習指導要領vs大学入試』 東北大学出版会, 173-191.

文部科学省 (2020). 「令和3年度大学入学者選抜実施要項」 文部科学省

https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/senbatsu/mxt_kouhou02-20200619_1.pdf (2021年8月23日).

立脇洋介 (2021). 「コロナ禍における個別大学の入学者選抜—令和3年度選抜を振り返って—」 第34回東北大学高等教育フォーラム『検証 コロナ禍の下での大学入試』 東北大学高度教養教育・学生支援機構, 基調講演1資料.